

**論文紹介 下地賀代子「石垣・宮良方言の係助  
辞-duの文法的意味役割」『日本語文法』10(2):  
143-159 (2010)**

著者	下地 賀代子
雑誌名	国語研プロジェクトレビュー
号	7
ページ	49-52
発行年	2012-02
URL	<a href="http://doi.org/10.15084/00000696">http://doi.org/10.15084/00000696</a>

## 〈論文紹介〉

下地賀代子

### 石垣・宮良方言の係助辞 *-du* の文法的意味役割

『日本語文法』10(2): 143–159 (2010)

下地賀代子

沖縄国際大学 総合文化学部 講師

国立国語研究所 時空間変異研究系 元プロジェクト研究員

琉球諸言語に古典日本語の「-ぞ」に対応する助辞の現れることはよく知られているが、その具体的な意味・用法についてはあまり明らかにされていなかった。そこで同論文では、南琉球に属する石垣・宮良方言（以下単に宮良方言）の係助辞 *-du* を対象とし、その統語的機能および基本的な意味・用法について記述した。以下はその本論部分の構成である。

1. はじめに
2. 宮良方言の動詞終止形—finite form
  - 2.1 叙述法・断定 / うたがい・たずね法
  - 2.2 勧誘・意志法
  - 2.3 命令法
3. 係助辞 *-du* と「結び」の形
4. 係助辞 *-du* の基本的用法
5. 「モーダルな」*-du*
6. まとめ

同論文は大きく2つの内容に分けることができ、2と3で形式的な面について述べ、4と5で統語的な面について考察している。

まず、形式的な面に関する結論を示す。宮良方言では *-du* と述語形式との呼応関係が一応保たれており、とくに叙述法・断定形の非過去形みとめ形式では、係助辞 *-du* の「結び」となる形式（非 N 語尾形）とならない形式（N 語尾形）とが対立している。例えば (1) と (2) では、文中に *-du* を含む文 (1) の述語に非 N 語尾形の *ho:* (降る) が現れているのに対し、*-du* を含まない文 (2) では、N 語尾形 *ho:N* (降る) が現れている。但し、うちけし形式、過去形ではそのような形式の対立はなく、*-du* の「かかりの弱まり」がみとめられる（内間 1985）。(3) は過去みとめ・*da* 形の用例である。

- (1) a:mi-N-du ho:=kaja:. 雨が降るかな。
- (2) ure: ufu-ami-nu ho:N=do:. これは大雨が降るぞ。

- (3) a. unu gusje: ta:-du nuNda=kaja:. このお酒は誰（が）飲んだかな。  
 b. taru:-ja cjaNtu fucire: nuNda=kaja:. 太郎はちゃんと薬は飲んだかな。

	非過去			過去		
	みとめ		うちけし	みとめ		うちけし
I 類	N 語尾形 非 N 語尾形	numuN numu	numanu	da 形 iTa 形	nuNda numiTa	numana:da
II 類	N 語尾形 非 N 語尾形	ukiruN ukiru	ukunu	da 形 iTa 形	ukida ukiTa	ukuna:da

(動詞活用表：叙述法・断定／うたがい・たずね法<sup>1</sup>)

次に統語的な面について、まず宮良方言の -du はいわゆる＜焦点化＞の機能を担っており、それが現れる文のタイプまたコンテキストとの関わり方によって、大きく6つの用法がみとめられる。

①疑問詞を含むたずね文、またうたがい文で、疑問詞（句）にほぼ義務的に後接し、その不定のモノゴトに対して話し手が抱いている問いかけや疑いを表す。

- (4) kīnu:-nu joi-ja tatta:-du ki:da:. 昨日のお祝いには誰々（が）来た？  
 (5) wa: no:-nu adzi-di-du gusji-ba numiru. あなたは何のためと酒を飲んでいる（のか）。

②疑問詞のないたずね文、またうたがい文で、話し手が確定したいコトガラ（の中心）が述べられている部分を示す。

- (6) ure: wa:-du ho:「da:. これはあなた（が）食べた（の）？  
 (7) kunu kwa:sa: kari-N-du ho:da=kaja:. このお菓子は彼が食べたのかな。

③のべたて文で、先行するたずね文あるいは文脈において不定、不確定であった部分の内容（の中心）が述べられている部分を示す。

- (8) unu gusje: ta:-du nu「mu. — hanako-nu-du numu=cjo:. Nga sjikitte harja:. この酒は誰（が）飲む？—花子が飲むって。ここ（に）置いていきなさい。  
 (9) unu hanasa: ba:-du uri-ge aNdzī. wa: aNdzī-na. その話は私（が）彼に話す。あなたは話すな。

④動詞のいわゆる「連用形」をとりたて、fu:（する）とくみあわさり、コトガラを断定的に述べる文の述語となる。

- (10) ure: me:da ukunu=dara:. sītuNde: itsiN asaniN-du fu:. あいつはまだ起きないよ。朝はいつも朝寝する。

<sup>1</sup> 各活用形はI類動詞 num-uN（飲む）とII類動詞 uki-ruN（起きる）に代表させている。前者は語幹末尾が子音の動詞、後者は語幹末尾が母音の動詞である。なお、非過去形は現代日本語共通語の「スルーシナイ」、過去形は「シターシナカット」にそれぞれ対応する。

- (11) kaNzjirija me:, kunu usa: siN-du hjaN=ju:. (<hi:-jaN) このままではもう、この牛は死  
んでしまうよ。

⑤真理や一般的なコトガラなどを表す文で、主題（提示語）以外の文の部分をとりにてる。

- (12) tida: a:Nta-kara-du agari ku:. 太陽は東から昇る。

- (13) fa:-ja izaba-du siiku. 子供は叱ってこそ聞く。

⑥単にその文の部分を目立たせる。

- (14) unu ne:ne:-ja nama-du hazjimiti. そのネーネーは今初めて。[注記・自分を訪ねてきた  
のは今日が初めてだ、ということ]

これらの用法はいずれも「焦点化」であるが、次のような違いがある。すなわち、①から③の用法では「不定・不確定なコトガラがある」ということがコンテキストによって示されており、-duはその「不定・不確定なコトガラ」に関わる文の部分をとりにてている<sup>2</sup>。これに対し④から⑥では、そのような関わりは積極的にはみとめられず、その文は主に一般的なコトガラ、脱時間的なデキゴトを表す。このとき -du は、そのコトガラ・デキゴトの「ポイント」を表す文の部分（排他的に）をとりにて、目立たせている。なお、①から③、④から⑥は完全に二分されるものではない。

また、自然現象や話し手の目の前の状態についてのべたてる文、うたがい文に現れる -du は、焦点化と同時に「モーダルな」ふるまいも示している。すなわち、これらの文では、-du はその表されるデキゴトが話し手の「推量的判断」による場合にだけ現れることができ、「中立叙述」の文には決して現れない。例えば、(15) と (16) とを比べてみると、いずれも空の様子を見ての話し手の判断が述べられているが、文 (15) にはその根拠が明示されているのに対し、文 (16) にはそれがない<sup>3</sup>。

- (15) fumuru-ba hi:riki: attsa-N ami-N-du ho:. 曇っているから明日も雨が降る。

- (16) ure: ufu-ami-nu ho:N=do:. これは大雨が降るぞ。

またさらに、文 (16) の ure: (これは) という語から、ここでは空を見て感じたそのままが述べられていると捉えられる。つまり、デキゴト描写、叙述の文に現れる -du は、その文が話し手の知覚したそのままではないことを示すものであり、その有無によって話し手の描写・叙述の仕方の違いが表し分けられているのである。

中右(1994: 61, 39-40)は<焦点化>を「ある情報を発話の焦点として取り立てることによ

<sup>2</sup> この用法は、現代日本語共通語の格助辞－ガの、「総記」や「排他」などと呼ばれる用法に対応するものである。

<sup>3</sup> またこのとき、-du との呼応関係によって、叙述法・断定の2つの形式—N 語尾形と非 N 語尾形—の対立も生じている。

## 下地賀代子

で、焦点と前提（図と地、前景と背景）からなる情報構造を作り上げる過程」と定義し、「話題化」とともに話し手の情報の提示の仕方に関わるモダリティの一種と位置づけているのだが、宮良方言の -du は、デキゴト描写、叙述の文においてそのモーダルな性質を色濃くする、と言うことができるだろう。コンテキストによる焦点化要素の制約を受けないこれらの文において＜焦点化＞の有無やどの要素をとりたてるかは話し手の任意によるものであり、よってこのとき、＜焦点化＞自体に話し手の心的態度が強く反映されることになると思う。

## 参 照 文 献

中右実（1994）『認知意味論の原理』東京：大修館書店。

内間直仁（1985）「係り結びのかかりの弱まり—琉球方言の係結びを中心に」『沖縄文化研究』11: 223-244. 法政大学沖縄文化研究所。

### 下地賀代子（しもじ・かよこ）

沖縄国際大学総合文化学部講師。博士（文学）（千葉大学）。千葉大学非常勤講師，国立国語研究所プロジェクト研究員を経て，2011 年 4 月より現職。

主な著書・論文：「琉球・多良間島方言のパフェクトの形式」（『日本語の研究』2(4), 2006）, 「形容詞の語彙的意味と形式の相関—琉球・多良間島方言—」（『千葉大学人文研究』37, 2008）, 「多良間島方言の語彙資料 (1)—「多良間島方言辞典」作成のための—」（共著, 『琉球の方言』34, 2009）, 「南琉球・多良間島方言の基本的な ja 構文について」（『国立国語研究所論集』1, 2011）。

受賞：2004 年度沖縄言語研究センター仲宗根政善記念研究奨励金（沖縄言語研究センター，2004），第 28 回沖縄文化協会賞金城朝永賞（言語部門）（沖縄文化協会，2006）。